荒木先生との思い出

清水　知子（筑波大学講師）

大学院生活というのは得てして先の見えない不安なものだ。ニートという言葉もまだなかった頃院生だった私は、熱心に研究に励む院生というよりも、籍だけおいて生活のために日々バイトに勤しむフリーターというのが内実だった。そもそも「研究者」にはあまり向いていないような気がいつもしていたし、今もそう思う。文学作品や作家について読むのは好きでも、いざ書き始めると自分の言葉も舌足らずで（そもそも言語のプロが書いたテキストを言語で考察するとは、なんとチャレンジングなことか）、読みこむための理論的な知識もなく、締め切り前にはいつも見るに堪えない代物に成り代わって、自分でも幻滅することしきりだった。そもそも自分が考えたいことにとりくめて、自分が書きたいことを書けるはずの恵まれた立場にあるはずなのに、なぜこんなことになってしまうのかと思うと、まったくもって本末転倒な気がした。文学が好きなことと、文学研究をすることは、まったく別のことのように思えた。しかも当時はつくばエキスプレスも本当に完成する日がくるとは思えず、都会から遠く隔絶された大学の一画のなかからどこへ移動することもできず、私は逃亡できる場所があるのならすぐにでもそうしたいと感じながら、とても不毛な日々を送っていた。

荒木先生との思い出は、必然的にこうしてまったくもって希望の見えない二十代の私の生活の思い出とセットになっているので、先生と出会って学問の喜びをかみしめることができたといった類の感謝の言葉とともに存在するわけにはいかない。むしろ、こうしてすっかり路頭に迷った子羊を、長い目で見つめながら、それでも駆逐せずに学問という領野の片隅で放牧させてくれたこと――この意味で、荒木先生以上に私にとってかけがえのない先生は他にいないと思う。おそらく先生は、持って行くたびにテーマが変わり、将来のヴィジョンもない私をつい引き受けてしまったことをきっと何度も後悔されたのではないかと思う。また私が修論を書いていた頃、先生ご自身もあの超人的な博士論文を執筆されており、私が博論を書いていたときには学類長として多忙な日々を送られていた。それだけでも大変な労務なのに、限られた時間を割いて私の拙い論文につきあってくださり、なんとか院生生活を修了させてくださったことに、本当に感謝している。

大学院を修了して十年近くたった今、自分が再びこの大学に身を置いていることはとても不思議な気持ちがする。キャンパスを歩くたびに、院生時代の思い出がこみ上げてくるが、そのほとんどは荒木先生なしには存在しない。どれだけ他に代え難い貴重な経験を先生と過ごすことで学んだのか、今になって、その意味の重さを感じずにはいられない。

先生、どうもありがとうございました。そしてまた、今後とも、こんな私に懲りずにどうぞよろしくお願いします。